



教皇様の聲

10

222号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1998

キリスト教ヒューマニズムを広めよう

(…) 教皇庁アカデミーの第2回会合に出席でき、光栄に思います。(…) 一年前、この場所で初めて皆さんとお会いしましたが、その時はアカデミーの改編を祝い、教皇庁文化施設の新たな刺激剤になることを願いました。こうして皆さんが新たな福音宣教のために行なっておられる文化や芸術、神学、使徒職活動などの分野での科学的・芸術的業績は広く認められるに至っています。

これからの皆さんの仕事は、それぞれ皆さんが専門としておられる様々な分野に及びますが、「紀元二千年の幕開けに当たり、キリスト教ヒューマニズムへの特別な貢献」となることを目指しています。この興味深く、しかも時宜にかなった企てに感謝を表すると共に、皆さんが勇気をもってこの道を進み、正確で、広く、深いキリスト教ヒューマニズムへの理解に貢献し、人間一人ひとりとその固有の価値、及び奪うことのできない尊厳のために尽力されることを望みます。

現代文化の諸相は、ますます教会の応答を要求する挑戦の様相を帯びてきました。教会は「時のしるしを探究して、福音の光のもとにそれを解明する義務を持っている。…教会は、人生と来世の生命の意味、およびこの両者の相互関係について人間が抱く永久の疑問に対して、それぞれの世代に適する方法をもって答えることができます」(現代世界憲章4番)

キリスト信者は、「道、真理、生命」(ヨハネ14・6)であり、また「多くの兄弟たちの長子」(ローマ8・29)であるイエズス・キリストが啓示して下さったとおりに、人間についての真実を示すことができなければなりません。キリストにおいてのみ、神の似姿として造られた(創世1・26参照)人間の尊厳は余すところなく輝くからです。

教皇庁立聖トマス・アクイナスとカトリック信仰並びにローマ神学アカデミーの皆さんに感謝します。皆さんは聖アクイナスの思想に照らし合わせ、キリスト教ヒューマニズムの概要について賢明に考察してくださいました。人間のあらゆる面を理解し、正しく表現することのできる真のヒューマニズムのために、「天使

的博士」のすぐれた教えは良き助けとなるでしょう。

靈的価値の根底を揺るがす不確実さや疑いに特徴づけられることが多い現代文化の中にあつて、キリスト教ヒューマニズム(本質的には変わらないが、現われ方は時によってさまざま)は、価値を求める欲求や、真に人間的な生活を求める願いに答えてくれます。こうした欲求は人の尊厳に関わることでずから、誰の心にも燃えさかっているものです。

教皇庁アカデミーの活動は、ペトロの後継者の任務と密接な関わりがあります。皆さんの研究、出版事業、芸術活動を通じて、あらゆる文化に属する人々が、まことのヒューマニズム・神と人間の顔を映す真の鏡を見い出すことを希望します。

皆さんの模範と真摯な学術研究によって、哲学や神学の研究と教授に新たな熱意が吹き込まれ、神の啓示の光を受けた人間の理性が様々な文化に属する言葉で「キリストの底知れない富」(エフェゾ3・8)を表現する方法を見つけることができますように。

私たちと同時代の多くの人々、特に若者たちは、20世紀後半を彩っていた魅力的な約束の多くがユートピアに終わり、存在に関わる不安から人間を解放してくれるものではなかったことを知って落胆しています。今日、多くの人が袋小路に入り込んだような不安を覚えています。人間の真実が、人間固有の尊厳を無視する人々によって否定されたり、見えなくなったりしている時こそ、多くの人にキリスト教ヒューマニズムについて知ってもらわねばなりません。それはキリスト信者、特に皆さんの務めです。

弟子としての謙虚さと証人の力強さで、教会の哲学、神学、文化上の遺産を深く掘り下げ、満足できる答えを求めている人々とそれらを分かち合うという崇高な使命が皆さんにはあります。

(…) ご出席の皆さんと皆さんの使命を、上智の座である聖マリアに委ねます。なお私からも特別の使徒的祝福を皆さんとご家族の方々に送ります。

マリアは処女であることを望んでいた 「聖母マリアと教会」シリーズ 19

1 マリアは、イエズスの受胎と誕生を告げた天使に尋ねます。「私は男を知りませんが、どうしてそうなるのですか。」(ルカ1・34) 子供のいない女性に奇跡的な誕生が告げられる場面がいくつか聖書に見えますが、それらを考えると、少なくともマリアのこの問いは大きな驚きを表わしているようです。それまでの例は、既婚で子供のいない女性に起こったことでした。神は彼女らの苦渋に満ちた祈りに答え(創世の書15・2、30・22~23、サムエル上1・10、ルカ1・13参照)、通常の結婚生活を通して(サムエル上1・19~20) 賜物を贈られたのでした。マリアはこれとは全く異なった状況のもとで天使のお告げを受けました。マリアは子供に恵まれない既婚女性ではありませんでした。自由な選択によって、処女のままでいようと考えていました。主を愛するがゆえに処女を守るつもりだったのですが、それは告げられた通り母になるということには障害であるように思えました。

一見、マリアの言葉は自分が現在処女であることを表明しているだけのようです。男を「知らない」、つまり処女であることを伝えたかったのでしょうか。しかし、「どうしてそうなるのですか」という問いに「私は男を知りませんが」という断言が続きます。これは、マリアが現在処女であると同時に、これからも処女を守るつもりであることを強調しています。マリアの言葉は現在形です。彼女の今の状態がこれからもずっと続くことを示しています。

マリアは、神のみ旨に全面的に協力した

2 とは言えマリアには神のご計画に逆らう考えは毛頭なく、全面的に従うつもりであることを表明しました。ナザレトの少女はいつも神のみ旨に完全に一致して生きていましたし、主を喜ばせるために処女の生き方を選んでいたのでした。実際、彼女は処女を志していたからこそ神のみ旨を受け入れたのです。「人間としても女性としても、自己の全てを込めて神にこたえたのですが、この信仰のこたえは、〈信仰に先んじ、信仰を支える神の恩寵〉への完全な協力と、聖霊の働きに完全に心を開くこととを含んでいました。」(『救い主の母』13番)

マリアの言葉や意向は理解し難いものに思えるかも知れませんが、ユダヤでは、処女性に価値あることでも求めるべき理想でもありませんでした。旧約聖書のいくつかの有名なエピソードがそれを物語っています。たとえば判事の書に出てくるエフテの娘は、まだ若くて未婚のうちに死に直面し、処女であること、結婚できないことを泣き悲しんだと伝えられています。(判事11・38)「生めよ、増えよ」(創世1・28)と主は命じら

れましたが、結婚は母になる喜びと苦しみを伴う、女性本来の召命であると考えられていました。

3 マリアの決心が育っていった課程を理解するには、キリスト教の時代が始まる直前のこの頃になって処女性に対する肯定的な態度がユダヤ社会に現われたことを思い起こさねばなりません。たとえばクムランで多くの歴史的な証拠品が見つかったエッセネ派の人々は、共同生活を送り、神との親密さを求めて、結婚を制限し、独身を通して生きていました。さらにエジプトにはエッセネ派の霊性につながる女性の共同体もあり、禁欲生活を送っていました。テラペテと呼ばれるこの女性たちは、アレキサンドリアのフィロが記している(『観想生活について』21~90)一派に属し、瞑想に専念し、知恵を探求していました。

マリアがこうした独身や処女性の理想を実践するユダヤの宗教グループについて知っていたとは思えませんが、洗礼者ヨハネがおそらく独身生活を送っていて、その弟子たちの共同体で大いに尊敬されていたことなどを考えれば、処女性を選んだマリアの決心をこの新しい文化的・宗教的状况の中に置いて考えることができそうです。

4 しかしながら、ナザレトの処女の場合は並外れたケースです。マリアの内なる決意を周囲の影響によるものと考え、彼女の身に起こった秘義の独自性を無視する過ちを犯してはなりません。とりわけ忘れてはならないのは、マリアが生涯の初めから素晴らしい恩寵を受けていたことです。お告げの時の天使の言葉でそれがわかります。「恩寵に満ちた方。」(ルカ1・28) 教会の解釈によれば、マリアはその存在の初めから、完全な聖性に満たされていました。無原罪の御宿りという特権が、ナザレトの少女の霊的生命の発展に影響を及ぼしていたのです。

主はマリアの貧しさを富に変えられる

このようにマリアは、聖霊の特別な励ましを受けて処女性の理想へと導かれたと言うべきでしょう。同じ聖霊が、教会の歴史を通じて多くの女性を処女としての奉獻へと駆り立てることになります。マリアの生涯を貫く比類のない恩寵の存在は、若い娘に処女を守る決心をさせました。生涯の初めから主の特別な賜物に満たされて、マリアは身体も靈魂も、処女としての自己の全てを神に捧げる決意をしていました。

しかも、処女として一生を送るというマリアの願いは、旧約聖書が賞賛する神の前での「貧しさ」にかなうものでした。この道に身を捧げるマリアは、女性の宝とされ、イスラエルで高く評価されていた母性をも放棄しました。このように、マリアは「信頼をもって主か

ら救いを希望し、それを受ける、主において謙虚な貧しい人々の中で特にひいでています。](教会憲章55番) 貧しい者として神に自己を捧げ、霊的な実り、神の愛の実りだけを求めていたマリアは、お告げの瞬間、主が自分の貧しさを富に変えられたことを悟ったので

す。彼女は処女のまま、いと高き御子の母となるのです。そして後に、その母性が全ての人に広がって行くこともわかりました。その人々を救うために御子は来られたのです。(カトリック教会のカテキズム501番参照) (96・7・24)

人は聖霊によって聖化される

聖霊シリーズ・最終回

1 イエズスは使徒たちに「息を吹きかけ」て、聖霊をお送りになりました。(ヨハネ20・21~22参照) この行動は、創世の書に見える人間の創造の場面で、「生命の息を吹き込まれる」(2・7)様子を思い起こさせます。聖霊とは、いわば復活された方の「息吹」であり、最初の弟子たちすなわち教会に新しい生命を注ぎ込みます。その最も著しいしるしが、罪を赦す力です。イエズスは言われました。「聖霊を受けよ。あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされる。](ヨハネ20・22~23) 「清い霊」(ローマ1・4)が注がれる所では、聖性に反するあらゆるもの、たとえば罪が打ち砕かれます。イエズスの言葉によれば、聖霊は「世の罪を指し示す」(ヨハネ16・8)方です。

聖霊は私たちの罪に気づかせますが、罪を赦してくださるのも聖霊です。これについて、聖トマスは言っています。「私たちを神と親しくさせるのは聖霊であるから、神が聖霊を通じて罪を赦されるのは当然のことである。](「異教大全」21, 11)

2 主の霊は罪を打ち砕くだけではありません。人間の聖化と神化を完成させます。神は「聖とする霊と真理への信仰をもって救うために、初めから」私たちを選ばれた(IIテサロニケ2・13)と聖パウロは言います。このような「聖化と神化」の成り立ちについて、もう少し詳しく見てみましょう。

聖霊は「愛のペルソナであり、賜物のペルソナです。](「生命の与え主」10番) 御父から与えられたこの愛は、御子が受け取り、返します。そして、贖われて「新しい人」(エフェソ4・24、ガラツィア6・15)となった者に伝えられるのです。私たちキリスト信者は、罪から清められたのみならず、生まれ変わり、聖なるものとされました。私たちは「神の本性にあずかり」(IIペトロ1・4)、「神の子と称され、神の子である」(Iヨハネ3・1)がゆえに、新しい生命を受けます。それは恩寵の生命であり、三位一体の神の生命にあずからせる、自由な賜物です。

聖霊の恩寵は私たちを

聖なるもの、神に似たものとされる

洗礼を受けた者との関わりにおいて、三位一体のそれぞれの神的ペルソナは互いに違う面を持ちます。一

つのペルソナは常に他の二つと共同して働きますが、入り混じることはなく、各ペルソナは独自性を保っているからです。

恩寵について考える時、大切なのはそれを「もの」として考えないことです。それは「何よりも私たちを義化し、聖化する聖霊の賜物」(カトリック教会のカテキズム2003番)だからです。恩寵とは、私たちを御子に似た者とし、神との親子関係に導く聖霊からの賜物です。私たちはキリストによって、一つの霊において御父に近づくことができるのです。(エフェソ2・18参照)

3 聖なる霊の存在は、まことに人間を内側から変えます。聖化し、神化する恩寵が、私たちの存在と行動を高みに引き上げて聖なる三位一体との交わりに生きることを可能にしてくれます。それは「人間の諸能力を神の本性にあずからせる」(カトリック教会のカテキズム1812番) 信仰・希望・愛の対神徳によって実現します。こうして信者は信仰によって、神や同胞や歴史を理性の立場からのみならず神の啓示という視点から眺めるようになります。希望によって、信頼と力強い確信をもって「望みなき時にもなお望みをもって」(ローマ4・18参照) 未来を見つめることができます。永遠の幸福と、神の国の到来というゴールを見定めているからです。愛によって、信者は心の全てを込めて神を愛し、イエズスが実行したように、自らを与え尽くして他者を愛することを義務づけられます。

4 信者一人ひとりの聖化は、教会の一員となることによって実現します。「おのおの神の子の生命はキリストに結ばれ、キリストを通して他の全ての信者である兄弟たちにつながります。彼らは一緒に、キリストの神秘体という超自然の一致を形作り、一つの神秘的な人格を形成します。](パウロ六世「免償について」5番) これが諸聖徒の交わりの神秘です。永遠の愛の絆が、天の祖国に到達した人も煉獄で清めを受けている人も、今も地上の旅路を続けている人も、全ての「聖人たち」を結んでいます。お互いの間には豊かな賜物のやり取りが交わされ、一人の聖性が他の全員を助けます。聖トマスは「愛に生きる人なら誰でも、この世でなされる全ての善にあずかる」(「使徒信経解説」)、「一人の行為は他の人の愛によって完成され、その愛がキリストにおいて私たちを一つにする」(In IV

Sent., d.20, a.2; q.3 ad 1)と述べました。

5 公会議は「どのような身分と地位にあっても、全てのキリスト信者がキリスト教的生活の完成と完全な愛に至るよう召されている」(教会憲章40番)ことを思い起こさせています。具体的に言うと、信者が聖人になるためには、神のみことばと聖霊の指示や励ましに示された、神のみ旨への忠実が必要だということです。聖母マリアや全ての聖人たちと同様、私たちにとっても、完全な愛とはキリストの模範にならって信頼を込めて御父の腕に身を投げることです。聖霊の助けを借りれば可能なことです。聖霊は私たちがどんな困難の最中にあっても、イエズスと共に「私はあなたのみ旨を行なうために来ました」(ヘブライ10・7参照)と言えるようにしてくださいますから。

キリスト者の日々の生活は大切な証し

6 聖性について考えるとき、修道生活は特別な色彩を帯びます。洗礼という召し出しを全うする

ために、貞潔、清貧、従順という福音的勧告を通して徹底的に主に従う生き方が、修道生活だからです。「キリスト教生活全体もそうですが、修道生活への召し出しは聖霊の働きと密接に関わっています。どんな時代でも、霊は若い男女にこの厳しい選択のあることを知らせることができます。…完全に応えたいという望みを起こさせるのは霊です。この望みが育つよう導き、『はい』と答えることができるまで助け、それを忠実に行動に移せるよう支えるのも霊です。呼ばれた人々の心に形成を与え、清く、貧しく、従順なキリストに似た者とし、キリストの使命を自分のものとするよう促すのも霊です。」(使徒的勧告「奉獻生活」19番)

聖霊の助けによって実現する際だった聖性の現われが殉教です。それは血を流して示される、主への最高の証しです。でも、キリスト信者としての使命を日々、「どんな身分や地位にあっても」愛の掟への徹底的な忠実を保って生きるなら、それはすでに意義深く実り多い証しとなっています。(98・7・22)

「カトリック教会のカテキズム」は信仰の規範

「カテキズム」は各地での要理教育の教科書

今回の会議のモットーは、「伝えたことは私自身から受けたものである」(Iコリント11・23)です。教会の信仰と福音宣教の使命を効果的に述べた言葉です。「カトリック教会のカテキズム」にはこのように記されています。「信仰とは、まずご自分を啓示された神の招きに対する人間の応答という、個人的な行為ですが、他から孤立した行為ではありません。一人だけで生きられないのと同様、一人だけで信じることはできません。自分で自分に生命を与えたのではないのと同様、自分で自分に信仰を与えたではありません。信者は他者から信仰を受けたのであり、また他の人に信仰を手渡さなければなりません。キリストと隣人への愛は、他者に信仰について話すよう促します。おのおのの信者は、こうして信者同士をつなぐ大きな輪の一環となります。他者から信仰をもたらされなければ信じることはできず、自分の信仰で他者の信仰を支えなければなりません。」(166番)

信仰を伝えるという任務において、「カトリック教会のカテキズム」は特に権威のある道具です。この数日間、皆さんはカテキズムの特徴と目的をより良く知るために、研究を重ねてこられました。カテキズムは啓示された真理を提示し、第二バチカン公会議に照らして、その真理が教会の中でどのように信じられ、祝われ、生かされ、祈られるべきかを示します。過去の貴重な遺産、特に聖書や典礼、教父たちの著作、公会

議、教導職の遺産の中から豊かに汲み上げ、古いものと新しいものとを倉から出し(マテオ13・52)、変わることのないキリスト教真理の新鮮さを現代社会に表明します。こうしてカテキズムは、教会が全体として持ち伝えている真理の委託物(遺産)に関する自覚と認識の度合いを雄弁に証明しているのです。カテキズム自体は信仰を教えるための確かな規準として、また各地での要理教育に備えて、信頼できる真の参考資料として作られました。



注意深く希望に満ちて、教会は過越からキリスト再臨まで、神の国を宣言し、また世界中から主のために良い麦を集めて、託された任務を果たします。主が戻ってこられるまでに必ずやっておくべきことは、「キリストの出来事」、その受難と死の過越の秘義を宣言することです。救いの最初の、そして普遍的秘跡となることこそ、教会の本質的な役目です。

みことばに奉仕することは、聖体を祝い、あるいは神への賛美を歌い、信者には日常生活の中で信仰を生きるように伝えるなど、教会の使徒的活動の中心です。中立の立場に立つどころか、教会はキリスト信者の傍らにあって、人生のあらゆる瞬間に、洗礼による超自然の本質から生じる要求にかなった選択ができるよう導いています。この「秘義の伝達や解説」の行為を通して、洗礼という花を咲かせる信仰が育ち、責任ある大人のキリスト信者として成熟して行くのです。

これこそが要理教育の任務です。容易な仕事ではありません。個人の生活のあらゆる面を考慮に入れなけ

ればなりません。相手が信徒であれ、奉獻生活を送る人であれ、要理教育は生活全体という脈絡に位置づけなければなりません。つまり、要理教育を受けるその人のみならず、その文化的・宗教的状況、社会、経済、政治的条件をも考えねばならないということです。生活全体の具体的な全ての面を、福音の光に照らして読み取り、解釈するべきです。

そのためには、今日、信仰への正しい理解を深めようと望む信者が遭遇する数々の問題を、注意深く検討する必要があります。その中には、人間はどこから来たのか、人生の意味、人が探し求める幸福の意味、家庭はこれからどうなるのか、などの大問題が含まれています。

現代人に神のみことばをまじりけなく完全な形で伝え、理解可能で魅力的なものとするためには、常に二重の運動が必要です。救いの秘義をあまさず見出すためには、福音の息吹を受けて生きる教会共同体による証しがまず前提となります。それでこそ要理教育は、共同体の現実の生活で実際に見られるものについて、より説得力をもって語ることができます。要理教育はある意味で、教会についての説明をしているのです。要理教育者は信仰のしるし(中でも一番重要なのは教会それ自身)を読み取ることを教えます。

それと同時に要理教育者は、人間生活にすでに存在する霊的な暗示を見分け、救いに向かう対話という実り豊かな段階を踏んで最大限に利用するべきです。こ

の仕事は、何度も繰り返し必要になります。要理教育は、人々の心に生じる数々の疑問を理解し、それらを創造と救いの愛によって用意された回答に向けさせなければなりません。祈りつつ聖書を黙想し、信仰をもって救いの歴史を貫く「神の驚くべきみわざ」を学び、教会の生きた伝統に耳を傾け、人類の歴史に注目するなら、これら全てがつながり合って、すでに人の心と精神の奥底で働き、人々をご自分のもとに引き寄せてその愛で満たし、御独り子においてご自分の子らとすることをとお望みの神を見い出すための手助けをすることができます。



親愛なる兄弟姉妹の皆さん。今回の国際要理教育会議が司祭の役務と修道生活、信徒の使徒職の実りある協力関係を強め、救いのみことばを新たに力強く宣言することができますように。それは教会の一番大切な使命であり、新しい子供たちを迎えるという絶えざる喜びの源です。心をつつにして、キリストが教会にゆだねられたこの大切な使命をたゆまず果たし続けなければなりません。生命のみことばを世に伝え、世を罪から解放し、キリストの輝きを帯びた新たな生命への道を開くため、頑張らねばなりません。この願いを胸に、皆さんの上に神の豊かな恩寵を祈り願います。心からの祝福を皆さんに送ります。

(「カトリック教会のカテキズム」ラテン語版の公布と「要理教育の一般指針」改訂に関連して、ローマで開かれた国際要理教育会議でのお話。97・10・17)

教会の二つの面・ペトロとマリア

敬愛する兄弟である司教の皆さんのために、愛を込めてご挨拶できるのは喜ばしいことです。霊性についての会議を機会に世界各地から集まった皆さんは、お互い同士の、またペトロの後継者との教会的交わりを深め、それぞれの司牧経験を分かち合いつつ霊性のさまざまな局面を考察しようとしておられます。

(…) 今回の会議は紀元二千年の大聖年に向けた準備の一環です。聖年直前の準備第二年目に入りました。今年、教会は特に聖霊について、キリストの弟子たちの共同体を聖化するその存在について黙想するよう招かれています。

使徒的書簡『紀元二千年の到来』でも思い起こしましたが、教会に様々なカリスマや役務を生じさせた同じ聖霊が、神としての力で教会の成員間の強いきずなを支え、キリストの体全体の交わりを活気づけています。「キリストの体の一致は聖霊の働きに基づいており、使徒的役務によって保証され、互いの愛によって支えられている。(Iコリント13・1～8参照)」(47番) この会議では皆さんは互いの司牧経験を持ち寄って、

考察を深めておられます。それは、司教の効果的な行政参加とは何かを、また、各自が委ねられた使徒的奉仕を生きる上での教会の交わりの意味を、より真剣に生き生きと理解するための貴重な機会です。

皆さんの今年のテーマは「国々の一致・民族の一致に向けて」です。教会の普遍的使命に注目した第二バチカン公会議の教えを受けて、現代世界という広大な地平を開きます。「教会は神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具」(教会憲章1番)だからです。皆さんがおいでになった地域の違い、福音に仕えるべく召されている任地の違いは、教会の「普遍性」を明快に表わしています。教会は多様な国籍から成りますが、キリストに贖われ、聖霊に照らされた一つの神の民を構成しています。

摂理に導かれ、キリスト信者の完全な一致を目指す中で、歴史は数多くの緊張と困難に満ちていました。使徒の後継者たちは、委ねられたキリストの群れを教え、治め、聖化するという三つの務めを通して独自の貢献をするよう、招かれています。

敬愛する兄弟の皆さん、処女マリアの母としての取り成しが、群れを率いる皆さんを導き、支えてくれますように。ペトロや他の使徒たちと一緒に高間で聖霊を待っていたマリアの姿(使徒行録1・12~14参照)が示すように、使徒の使命と神の御母の使命は密接につながり、互いに補い合っています。まことに、教会の全使命が目指す理想の聖性は、すでにマリアの内に予見され、決定されていました。

このように教会には、「ペトロ的な側面」に加えてかけがえのない「マリア的な側面」もあるのです。前者

はキリストから教会に委ねられた使徒的な司牧の役務を表わし、後者は聖性と神の救いの計画への全面的な服従を表わします。「ペトロとマリア、教会のこの二つの側面は、互いに補い合いながら深くつながっています。」(教皇庁でのお話、87年12月22日)

皆さんが教会のこの二つの側面を忠実に反映してくださるよう望みます。会議の霊的成果を、使徒の元后・一致の母である処女マリアのご保護に委ね、心からの祝福を皆さん一人ひとりにお送りします。(…)

(第21回司教霊性会議に寄せて。98・2・14)

教皇さまの動き

●9・5 マザー・テレサの一周忌に当たり、教皇さまはイタリア・カトリックアクションのメンバーに向かってお話しになった。「慎ましい家庭に育ったこの目立たぬ女性は、神への信仰と隣人への愛によって実に大きな仕事を成し遂げました。」「実にマザー・テレサは、最も貧しい人々への神からの贈り物であると同時に、見捨てられた人々への大いなる愛によって教会と世界への素晴らしい贈り物でもあります。彼女は日々祈りの中で全てを神に捧げ続け、その奉獻は隣人への全き贈り物となって現われました。」「マザー・テレサの微笑み、その言葉と行動は、あの善きサマリア人のように地上を歩むイエズスの姿を再現させます。その愛のわざは、彼女が創設した大家族の手で引き継がれています。私たちは福音の道を選んだマザーの娘たち・息子たちに感謝し、聖霊がマザーの心にかき立てられたカリスマに常に忠実を保つことができるよう祈りたいと思います。」「マザー・テレサの偉大な模範を忘れることなく、ただその言葉を思い起こすにとどまることのありませんように！人間と、人間の基本的な人権を第一とする勇気を持ちましょう。国々の指導者たちに申し上げます。軍事力を頼みとしないでください。断固たる決意で軍縮への道を行ってください。必要な資源をまことの文明化のために使い、協力して飢えや病気と戦い、全ての人々が尊厳をもって生き、死ぬことができるために。神ご自身がそれを望み、マザー・テレサの証しを通じて、私たちに告げておられるのです。」

●9・13 カステルガンドルフォにて、お告げの祈りの時間に。「学校は家庭と協力して、基本的な道徳的価値について教えなければなりません。それは教育に

とって何よりも大事なことです。」学生たちに、「学校を大切にしましょう。教育を受けることは喜びであり大きな賜物、基本的権利、そして義務でもあります。世界には、基礎教育を受ける機会すらない同年代の人たちがいることを考えてください。文盲は大きなハンディキャップであり、飢餓やその他の困難を増大させます。経済や政治の問題のみならず、人間としての尊厳すら危うくなるのです。教育を受ける権利は、人間である権利そのものです。」「学校は若者たちが正しい方向で人生の意味を探す助けとならなければなりません。特に現代のように社会や文化の大きな変化の中、基本的な道徳価値さえ疑問視されている状況では、学校の担うべき責任がそこから生じます。」

●9・16 聖ペトロ広場での一般謁見にて、聖霊と人間の心の中の「真理の種」について話された。「主の霊は宇宙に満ちています。霊はキリスト・イエズスを通じ、絶えず人々をあふれる真理へと導いておられます。」「真理の霊の働きかけは信者だけでなく、福音を知らない人々にも及んでいます。」「教会の告げる真理の言葉と、諸文化に現われた観知や考え抜かれた哲学とが出会う時、文化と哲学は神の啓示の中に自らの完成を見るよう招かれています。第二バチカン公会議が強調したように、このような出会いは教会を豊かにし、真理をもっと深く浸透させ、様々な文化の伝統の中で、本質において変わらぬ教会の姿をその時代に最も相応しい形で表わすことを可能にします。」(福音と文化の断裂こそが現代の不幸である)というパウロ六世の考察に言及して教皇さまは、この断裂を克服するためには「聖霊が人々の心にまいた(真理の種)を見つけだす信仰の眼差しが必要です」と述べられた。

「教皇様の聲」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448